

持続可能な森林経営研究会
第 17 回セミナー
2009 年 7 月 21 日
議事概要

「森林、林業、木材利用の改革についての意見」

この議事概要は、事務局でとりまとめたものであり、発言によっては、趣旨を取り違えていることもありえますので御容赦下さい。

1. 内山右之助氏による講演

1-1. 要旨

※ 緑色の文字は、講演中にされた補足説明です。

森林整備推進の問題点

- 事例紹介 パワーポイントで施業事例の説明
- 森林所有者 なぜ材が出せないのか。
 - ・ 森林所有面積が細分化されている
10a、20a など。集約化、提案型施業が効果ある。
 - ・ 森林林業に対する意識が少ない
 - ・ 山林からの収入が望めない
- 森林組合
 - ・ 森林組合が広域合併によって管理面積が広大になっている
全域にわたっては管理ができていない。
 - ・ 森林整備を森林組合に全面的に頼るのは不可能である
作業員 20 人で 1 万 ha は無理だろう。
 - ・ 他の林業事業体との連携が必要である
森林認定事業体も、林業だけでは食べていけない。公共事業を行ったり、国有林の入札に参加している。国有林の良さは、まとまった面積があることと、期間が長く融通も利く点である。
- 解決策として
 - ・ 自伐林家の育成
雇用するほど、経営は苦しくなる。小さな事業体の方が強い。日当になると思えば、作業はできる。
 - ・ 農家林家が自分の山林に行く必要がある
そして、少しでもいいからできるだけ材を出す。

- 地産地消の推進

大型工場1つに頼るのではなく、地元の小さな製材工場の育成も必要。
関わる人みんなが山に目を向けるべき。

1-2. 講演



作業システムについて

- 路網の配置
 - 幹線作業道より準線的に等高線に近い形で作業道を配置し作業機械の作業が安易に行えるようにする。
 - 地引ウィンチによる全木集材を少なくする為、引寄せ距離は30m以内を目標とする。
 - 将来の間伐、皆伐時に利用可能で近隣施業予定地と併用が可能になるように考える。
- 作業システム1
 - チェーンソー伐倒⇒ハーベスター造材⇒フォワーダ搬出
- 作業システム2
 - チェーンソー伐倒⇒地引ウィンチ全木集材⇒ハーベスター造材⇒フォワーダ搬出
- 作業システム3
 - ハーベスター伐倒⇒ハーベスター造材⇒フォワーダ搬出

Forest Form Uchiyama

- 林内作業道=葉脈路。葉脈のように密に張り巡らされているから。
- 間伐のために、細かく作業道を入れる (300m/ha)。1,000 円/ha の補助金が出る。

群馬県S市I町A林班 林分材積調査結果

林齢	●56,51年	ヘクタール本数	●1,408本
面積	●1.19ha	全伐採本平均直径	●20.7cm
立木本数	●1675本	全伐採本平均樹高	●18.4m
採育予定本数	●809本	立木材積	●794.27m ³
伐採本数	●615本	採育材積	●494.28m ³
支障本本数 (作業道開設)	●251本	全伐採材積	●299.99m ³
間伐率 (作業道分支障本含む)	●52%	採育率 (日付含む)	●54%

Forest Form Uchiyama

- これまでに間伐されていない山である。
- 森林所有者に、何らかの形で還元しなければならない。
→まとめて伐って出す。補助金は、25 万円/ha
- 細いものも一本当たりで単価売りすれば売れる。

群馬県S市I町B林班 林分材積調査結果

林齢	●89年	ヘクタール本数	●980本
面積	●0.41ha	全伐採本平均直径	●34.9cm
立木本数	●402本	全伐採本平均樹高	●26.0m
採育予定本数	●260本	立木材積	●489.79m ³
伐採本数	●137本	採育材積	●376.12m ³
支障本本数 (作業道開設)	●23本	全伐採材積	●113.67m ³
間伐率 (作業道分支障本含む)	●31%	採育率 (日付含む)	●65%

Forest Form Uchiyama

- 89年生の場合、補助金はない。

素材販売にかかる経費

- 販売経費（市売手数料）
 - 販売代金（市売）の5.3%×消費税
- はい積料（市売）
 - 売上数量（m³）×500円×消費税
- 木材運搬費
 - 売上数量（m³）×1800円×消費税
- 販売手数料
 - 販売代金の3.0%×消費税

Forest Farm
Uchiyama

施業実施結果 A林班

素材生産量	• 162.03m ³
1m当たり素材生産単価	• 5,580円
1人日当たり	• 6.00m ³
1m当たり素材販売単価	• 7,848円
山元清算金額	• 183,820円

Forest Farm
Uchiyama

施業実施結果 B林班

素材生産量	• 47.16m ³
1m当たり素材生産単価	• 3,770円
1人日当たり	• 9.07m ³
1m当たり素材販売単価	• 7,397円
山元清算金額	• 33,290円

Forest Farm
Uchiyama

- 高密路網(300m/ha)と高性能林業機械を組み合わせた間伐システムで素材生産経費を下けても原木価格の低迷により採算割れが生じてしまう。
- 立木価格が0円でも間伐補助金無しでは、間伐を行う事が不可能な山林もありえる。
- この施業の計画時期は平成20年12月で当時の原木価格は杉中目11,200円であった、施業完了時期は2月下旬、杉中目9,000円で木材価格の低下により予定販売価格の採算割れが生じてしまった。
- 木材価格が不安定だと森林所有者に間伐施業の提案をする事が困難である。
- 提案型施業を行う場合は、素材生産業者に計画の時期に立木代金として販売する事ができる。
- 計画的に森林整備を遂行するには、木材が適正価格で安定する事が必要不可欠である、それによって持続可能な森林経営が可能になる。

Forest Farm
Uchiyama

- 素材生産費はこの10年下がってきたが、販売関係費は落ちていない。3000円/m³かかる。

- 内山林業では端材や曲材はチップにして出すが、ここではそこまで出すと採算が取れないのでB材まで。

- 昨年12月には材価は約10,000円/m³だったが、年が明けてから、不況でどんどん下落した。

- 25万円の補助金で山元清算金額が18万円であるから、補助金が無ければ赤字である。

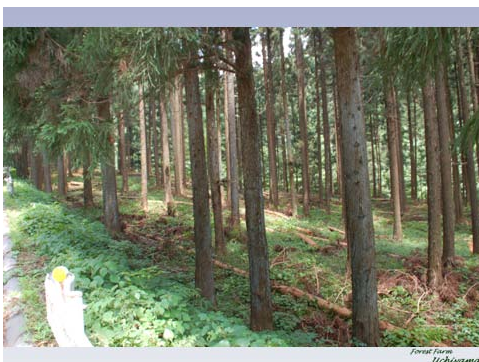
- 50年生だろうが80年生だろうが同じ並材であり、同じ単価で売られる。

- 事前に一度でもつる切りや間伐をしておく、素材生産の際にずっと楽である。

- 太いため、生産費は安くなった。



- 写真は道と道の間にある林なのに、全て伐り捨て間伐が行われている。材価が安い
ため、そもそも搬出する気が無い。
- 補助金は、伐り捨て間伐だと **17万円/ha**、
搬出ありだと **25万円/ha**。伐り捨て間伐
なら、補助金内でほぼできる。



- 写真左下には、舗装道路が見えている。
それほど、道端の林地だという事。
- 伐り捨て間伐は、補助金を使いつぶして
いるだけ。社会に還元すべきである。材
を出すことで、雇用が生まれる。それが
社会貢献。
- 伐り捨て間伐は **3~4日**で終わってしまう
が、搬出ありの間伐であれば **1~2週間**か
かり、その間の雇用が生じる。



- 明らかに柱材になるような木が伐り捨て
られている。

2. 中尾由一氏による講演

2-1. 要旨

<持続可能な森林づくりに向けて> 国産認証材利用促進協議会 中尾由一

1. 持続可能な森林づくり

- 従来の森林施業方法である間伐、皆伐方式では採算性が低いため森林の経営はまかなえず、結果的に放置林となってしまう。
- 建築用材として計画伐採（建築用材のみ選択的に伐採）する方式は、継続的な収益の確保が可能であり「持続可能な林業経営」につながる。

<事例紹介>

- 例えば、持続可能な森林として **SGEC** に認証されている富士の北山（日本製紙社有林）では、建築用に向けた施業を具体的に実施し成功している。
- 富士北山では、建築用の選択伐とともに、建築に適した材の確保のため「寒切り」「葉枯らし」という方式を採用している。
- 葉枯らし乾燥は葉をつけたまま森の中で天然に乾燥する方式で、含水率を半分にすると共に、木の持つ本来の強さと粘り、色艶、香りが保たれるため、建築用材として最適である。
- 葉枯らしによる天然乾燥は輸送に係る **CO2** の削減、人工乾燥時に発生する **CO2** 削減という大きな環境効果がある。

2. SGEC 認証森林の現状と動向

- 事例紹介した富士北山に代表される「**SGEC** 認証森林」は、発足後6年目であるが現在までに約 **79** 万 ha が認証され、近年大幅に増加している。
- SGEC** 認証森林は全国に広く分布しており、特に北海道と九州での認証面積が大きい。
- 近年は林野庁や環境省、国交省など国で進められている様々な仕組み（カーボンストック、キャスビー等）において、**SGEC** 認証森林の産出木材を仕組みに取り入れる動きが活発化している。

3. 持続可能な森林経営

- 持続可能な森林経営は、新商品及び流通の開発にかかっている。
- 例えば、徳島県の「杉のムク・**30mm**の床板」、北海道のトドマツ・エゾマツ集成材の「日本版ホワイトウッド」としてのアピール、山陰や岡山の「認証材の集成材、合板」がある。
- 森林認証及び認定事業体を対象とした流通ネットワークを形成する。

4. 認証材を活用した「認証材住宅の現状と動向」

- 熊本県の新産住拓（株）では認証材住宅を切り口として大幅に業績を拡大している。
- 山口県の安成工務店では山と直接的に連携した「認証材住宅」ネットワーク形成が注目を集めている。

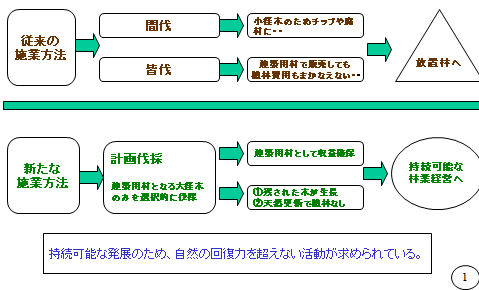
2-2. 講演

「持続可能な森林経営研究会」第11回セミナー実施
2023.7.21 中尾由一

持続可能な森林づくりに向けて

一般社団法人 国産認証材利用促進協議会
会長 中尾由一

1. 持続可能な森林づくり



①

（事例紹介）SGEC認証森林 その1

<SGEC認証森林第一号 日本製紙 富士北山社森林>



【建築用に向けた施業の実施】

- 選択伐（建築用材となる大径木のみを選択的に伐採）
- 寒切り（11月～2月の適期伐採）
- 葉枯らし乾燥

②

（事例紹介）SGEC認証森林 その2



【葉枯らし乾燥】

- 葉をつけたまま約半年間、森の中で天然に乾燥（木幹内側の水分が気化から蒸散）
- 含水率をおおよそ200%から100%に半減
- 木の持つ本来の強さと粘り、香り、色艶が保たれる（化学物質の防虫剤不要）

③

・1951年から製紙会社の山林部で仕事をしていた。当時は日当 500~700 円、材価は m^3 換算 8000~9000 円であった。現在は、この頃と同じ材価だが日当は大きく違う。この状況では、持続可能が達成できるはずがない。

- ・択伐方式で複層林化することが、持続可能な森林づくりのために良いと考えている。
- ・間伐は、山を作る作業であり、ただ伐れば良いのではない。コストだけ考えて列状などと言っているのはナンセンスである。
- ・天然更新を活用する。

・673ha あるうち、30ha で選択伐によって収穫している。

- ・強制乾燥では m^3 当たり 5000~7000 円の費用がかかるし、重油炊きボイラーを使えば CO_2 も排出する。
- また、強制乾燥は蒸気で行うためにリグニンが破壊され、材として長持ちしない。

事例紹介—SGEC認証森林 その3



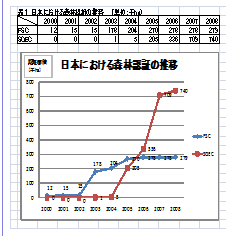
【CO2削減効果】

- 重量が半減し、輸送コストと共に輸送時のCO2も削減
- 乾燥に要する石油エネルギーも削減
- 木を使う一人一人が温暖化防止への取り組みを意識できる

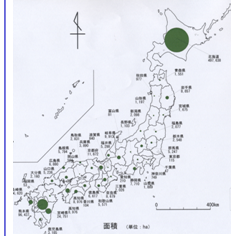
4

2. SGEC認証森林の現状と動向

SGEC認証森林は2003(H15)に発足し、2008(H20)までに74万haで増加した(H21.6現在で約79万ha)。



SGEC認証森林は全国に分布しており、北海道で約50万ha、熊本県で約10万haとなっている。



SGEC森林認証材は国で定められているカーボントラックやキースピーなどの仕組みに、現物認証材料として位置づけられつつある。

5

3. 持続可能な森林経営

持続可能な森林経営は、新商品及び流通の開拓にかかっている。

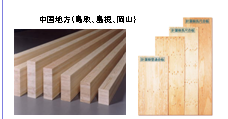
<1. 杉のムク 30mmの床板>



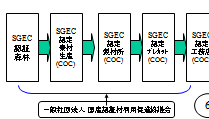
<2. 日本版ホワイトウッド>



<3. 認証材の集成材、合板>



<4. 流通の開発>



6

- ・スギのムク材
- ・材料の開発が重要。需要の確保がなければ持続経営はできない。
- ・流通の開発について。山から建築までの流れを作る。

4. 認証材を活用した「認証材住宅の現状と動向」

熊本県:新産住拓株式会社

- ・全棟を森林認証材住宅
- ・H20実績 200棟 (グループ会社含む) ※前年比50%増
- ・長期優良住宅 (200年住宅) 認定 30棟完工
- ・農商工連携モデル事業認定
- ・木づかい運動 表彰第1号



山口県:株式会社安成工務店

- ・山と連携する家づくり
- ・大分県:第3セクター「トライウッド」
- ・林野庁「顔の見える木材での家づくり」グループ30選 選定
- ・天然乾燥へのこだわり

- ・長期優良住宅について。国産材の利用推進、建築についての助成には、国土交通省が非常に熱心に取り組んでいる。

7

「国産材活用による循環型社会」の構築のために



1. 持続可能な森林経営を実現すること
2. 環境対策(CO2削減)に寄与すること
3. 国産材を使った健康な家づくり(シックハウス対策)

⑧

1. 持続可能な森林経営を実現すること
→森林と建築業者のタイアップ
2. 環境対策に寄与すること
→自然乾燥
3. 国産材を使った健康な家づくり
→ヒノキは人間にとって好ましい匂いだがシロアリは嫌う。よって薬液が不要で健康に寄与する。

3. ディスカッション

(発言者の表記について：説明者 内山氏→内、中尾氏→中、委員→委、アドバイザー→ア)

委：選択伐は択伐とは違うということだった。現在一斉林であるところを将来天然林に持っていこうという場合に限定されるのか。

中：その通り。建築業界は、なるべく使える材を出してほしい。間伐においても。

委：後継樹はどうやって入るのか。

中：現場を見ると、新しい小さい木が入ってきている。天然下種更新ができると考えている。

委：天然下種更新は、富士山のふもとの森林だったから可能だったのか。

中：全ての山でできるかはわからないが、できる所は他にもある。できる所でできることをやっっていこう、という考え。

委：内山氏に質問。森林組合で道を入れる技術や機械を使う技術がなくて内山氏に話が来たということだったが、森林組合側と内山林業の役割分担、仕事の進め方はどうだったのか。

内：山の仕事はうち、事務的なことは森林組合という形。補助金の申請手続きや所有者との交渉などが森林組合の主な仕事であった。伐る量などについては両方で相談した。役割分担通りに森林組合にも収入があった。1000m 道を入れて 1000 円/m の補助金が出るのだが、道を入れる我々は、補助金申請などの手間がないから 700 円/m もらって、残りは森林組合、といった形。市場に出すにも手数料が発生するので、森林組合にもある程度収入がある形にしておかないといけない。

委：路網のルートを決めたのはどちらか。

内：うちがやった。

委：現場の確認は森林組合がやって所有者に引き渡す、といった形か。

内：そう。森林組合にも色々な所があるので、成長していってくれば。

委：いくつか現場をやっっていくと約束事ができてきて効率化も進むのでは。地域でうまく回るようになるかと思うので、続けて欲しい。

内：情報交換は重要だと考えている。

委：他の素材生産業者も巻き込んでやって欲しいと感じた。

中尾氏の講演に関して。1952年頃に500~700円の日当というのに驚いた。去年は合板11,000円、今年は8,000円。搬出や輸送コスト等5,000~6,000円かかるから、それを引くと5,000円で売っていたものが2,000円になってしまうということ。補助金で補ってはいるが。足りないから補助金で補う、住宅の方も問題があるからその場で補ってんしていく、というように、それぞれの場所ではばらばらに行われていて一貫性が

ない。整理してトータルで見ないといけない。こういった委員会で整理してうまくつなげていくと、現状を踏まえた提言ができると思う。

中：今日はそれを問題提起したつもり。きちっと整理すべき。森林は、材を出すだけでなく、保水などでも人間の役に立つ。そこをきちんと人々が理解しないと。

委：森林と林業がばらばらなのが現実という印象。

中：提言するのが本委員会の役割。どう間伐するかとかいう問題ではなく、もっと根本的な所から考えなくては。

委：今の材価の話。内山氏の講演で、50年生よりも80年生の方が安くなっている。現在、大径材が安すぎる。

中：我々は建築業者にきちんと説明しているから、全ての材が8,000円で取引されているわけではない。材価が不安定なことは良くない。

委：素材生産の低コスト化は各自の努力が進んでいるが、素材販売にかかる経費は3,000円と大きい。この辺についてどう考えるか。

内：トラックの運賃は1,800円/m³。運ぶ物が丸太でないと運賃はもっと安い。なぜ丸太だと高いのか。かつて2人組みで積み下ろししていた当時の価格が残ってしまっている。今は一人で作業できるはずだから、もっと安くてもいいはず。市場の手数料などは固定費だから、そういったところを下げられれば。現場に広い土場があって大きいトラックが入れるならオントラックで販売してもいいが、そうでない場合はやはり市場に一度卸さない。

委：小さい製材工場も必要ということだったので、やはり市場も必要だということか。内山氏はどうお考えか。経費から考えたら市場をどう省くかという話にもなるが。

内：大きい製材工場は、特定の材をオントラックで買える。しかし出す材が量的になかなかまとまらないのが日本の森林の現状であるから、ストックヤードの役割を市場が果たしている。よって、市場はある程度必要。運送賃と市場の手数で売値の2割を占める。その位の固定費は仕方ないと思う、その代わりに細くても太くても様々売ってもらえるのが市場の利点。

委：中尾氏の講演を受けて、意見がある。スライド⑥「流通の開発」について。SGEC認定工務店もCOC認証がいるということだった。中小の工務店もあるわけで、プレカット段階でCOC認証をとってれば、プレカット材は原材料ではなくパーツと考えてSGEC認証材として出せる。小さい工務店が多い中、それら全てにCOC認定を求めるのは厳しいだろうし必要もないのでは。

中：小さいところまでCOC認定をとってくれと進めるつもりはない。

委：工務店までCOC取る必要がないのでは。プレカットまでで取れたのなら、その後も認証材として認めてもいいのでは。

中：建築材は無垢材ばかりではない。むしろ、工務店がCOC認証をとることが最も重要だ

と私は思っている。

ア：内山氏の講演に関して。例に挙げられていた森林は、間伐率 **50%**強とのことだった。間伐が少し遅れた状態の林分で **50%**強というのは現実的にきついかと思うのだが、現地ではどうだったのか。

内：分母の問題。分母が小さいのにたくさん伐るのは難しい。きちっと整理されていれば良いが、被圧されている木が多いのなら伐り倒すべきと考える。

ア：もう一点。土日の休みで森林所有者は山に行け、というのは同感。かつて三重県の伐採跡地買って自分で作業をした。楽しかった。作業をすれば山もできる。

委：間伐率は、支障木も含まれているということだった。材積間伐率と本数間伐率がよく混乱するが、ここでは本数間伐率。劣勢木をたくさん伐る事で間伐率が上がっている。材積間伐率に直すと **3** 割位。

内：間伐率を材積と本数とどちらで考えるかで、変わってくる。本数で **3** 割でも材積で **2** 割だから足りない、など。一般的には皆、本数間伐率を使っている。

ア：天然乾燥や選択伐施業は、素晴らしいと思う。しかし、選択伐には相当な技術が必要で、そういう技術者が少ない。天然乾燥で伐り倒したままかなりの期間置いておくことになる、伐り倒し方も技術が必要かと思う。そこら辺をどう考えているか。また、低コストを目指す時に、機械化すれば機械を年間効率的に使っていく必要があるが、寒い時期にだけ伐る、となると低コストをどうやって実現していくか。

中：選択伐では、倒れる方向に倒している。**6** ヶ月置いておくと言ったが、徳島県の例では葉枯らし乾燥は **3** ヶ月で含水率を同じくらいまで下げられるとのことだった。全ての地域でやれるとは思っていないので、できる所ではぜひやって欲しい、と考えている。**1951** 年当時は、切った木を谷に落としてそこから出していたから、搬出までに時間がかかって、自然乾燥ができていた。その経験に基づいて、同じことを今やっている。

ア：選択伐と天然更新でうまくいった事例を今後紹介して欲しい。

中：ドイツの人が来た時に、紹介した。できるだけ普及していきたい。

委：**4~5** 年前に、葉枯らし乾燥をやったことある。山の斜面上側に倒して、山で **4** ヶ月くらい寝かせた。それから市場に持っていたら、ついた価格は安かった。葉枯らししたものと生のものを両方買って製材すると、乾燥の時に困るから、だそうだ。中途半端に葉枯らしをやって少量持っていては駄目だった。流通ルートとセットでうまく流すことを考えないと。

中：できる所からやっていくことで持続可能な森林経営になって行く。建築会社が買い手についているところなら可能。市場では相手にされない、というのもよく分かっている。

委：50~60年代の賃金—木材価格の割合と現在では大きな違いがある。根本的に考えないと、とのことだった。当時は人工林であれ天然林であれ収穫し、その伐採跡地を新植して成り立っている所を人工林としていた。よって、現在の人工林は当時作られたものと認識している。現在は、林業経営をする所は人工林のほんの一部。どこまでを林業経営を考える生産林として残しであとは林業を放棄、というのをどう考えたらよいか。

中：今の材価のままでは駄目、抜本的に考え直さないと持続可能な森林経営にならない。協会としては、建築会社と山主をつなごうとしている。

内：人工林の取り扱いについて。うちは、拡大造林している。去年、**4.1ha85**年生の広葉樹を伐った。広葉樹を伐って針葉樹に変えた。**ha**あたり**150**万円の売り上げがあった。伐った時に樹種別に分けて、ナラはチップにする中でも高いから、というように区別した。あとは運ぶ時に別々に運べばよいので楽。森林組合に植林をやってもらっているが、費用は補助金抜きで**10**万円強/**ha**。針葉樹と広葉樹を比べると、同じ林齢で材積は針葉樹の方が**3**倍大きい。できる所は針葉樹にしていかないと、材価が低い中で経営が回っていかないのではないかと。施業計画を組む、保安林になると補助率が高い。施業計画をきちんと立てて補助率を上げることで拡大造林ができる。なぜやったかという、材価が安くなってきているから量で勝負しなければならないため。あとがまを作っておかないと持続経営にならないのではないかと考える。**20**万円/**ha**くらいの費用ならいいのでは。自分で伐るなら儲けが出るが、人を雇うと**1**割位しか残らない。自伐林家育成の必要性を、こういうところから感じる。悪いときには原点に戻れ、の考え方。昔やっていた方法を見返してみる。

ア：内山氏の講演に対して。林業自体が大きな問題を抱えているわけだが、零細な所有者が大きな問題。数が多い。放置されている林分が**100ha**以上ある部落などある。周りには県有地や生産林があるが、純然たる民有地が**200~300ha**あって、それが放置されている。所有者は、林業が全く分からない世代になってきている。こういう人達は、林業関係者が頑張ってもそれをどう自分の所に適用すればいいのか分からない。自分の仕事もあるし、山の作業をできない人が多いのではないかと。十数年で、この状況は加速すると思われる。みんな東京に出てきたがっているから、林地を処分してしまう。部落内で買ってくれる人がいればいいが、そういう余力も気持ちもない。不動産に任せると、東京のお金持ちとかが買ってしまう事が増えていくだろう。お願いしたいのは、零細な山林所有者はどうしようもないが、気持ちだけはなんとかしないとけない。内山氏のように大規模にやっている人達の助けが有効だと思う。先程の講演の中で天然のカラマツについて大手商社から買い付けの話があったと言っていた。足りなかったらついでで手に入れるといった話だった。ご自身の森林の材だけではなくて、近

隣の零細業者の材も一緒に扱っていただけると助かる。作業の世話なども含めて。大規模企業が零細な山林業者を手助けすることは考えられるか。

内：山林所有はいろんな考えを持っているいろんな形態でされている。環境だけを考えている人もいる。うちは**400ha** 所有しているが決して大規模ではない。それぞれの立場で考えてやって行くのが我々の業ではないか。零細の手助けをする場としては、森林組合がある。所有者の意識次第で、集約化だの団地化だの手段はある。零細業者が集約化のためにまとまるか。個々に言いたいこといってはいは駄目。ゴルフ場開発の時に思ったが、すぐに**300ha** くらいまとまる。それは、お金で買うからである。お金次第ということ。近隣の所有者たちがまとまって森林組合に話を持っていくことくらいあってもいいのでは。そうしたら、森林組合が方法や制度を説明してくれるはず。

委：零細業者の手助けは森林組合の仕事だ、と私も思う。親の山をインターネットで売る、というのをやったら、結構売れた。デベロッパーとして森林組合に入ってもらって、管理は森林組合がする、という形だった。森林組合に管理の肩代わりを義務付けるような制度を検討していくべきでは。大地主の人に、隣も見てくれ、というのは結構難しいかと思う。

委：集約化の担い手は誰か、という問題。森林組合が集約をして実行を内山林業がやったという例があるように、きちんとすれば、実行する団体は現れるのではないかとも思う。集約化の苦勞に対してどういう風に報われるのかを明確にする必要性を感じる。